

令和 5 年 6 月 1 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02435

研究課題名（和文）発達系の系統性を踏まえた科学の保育実践の実践的開発

研究課題名（英文）Science practices in childcare settings based on child development about exploration on scientific phenomena

研究代表者

滝口 圭子（TAKIGUCHI, Keiko）

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：60368793

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：保育の実践事例を分析し、科学的な現象に遭遇した時の乳幼児の反応、疑問の解明に向けての試行の形態、現象の探究の背景にある感情と意識について、0歳から5歳までの年齢別に整理した。5歳児を対象に実験調査を実施し、自然物（アベマキの葉）の探究の方法と意義を明らかにした。保育者を対象に質問紙調査を実施し、乳幼児の探究に対する「興味深い」という解釈から、保育者の科学実践の更なる開発可能性を指摘した。成果に基づき、保育現場の科学実践の本質的な要素3点（身の回りの事象の機構、因果関係等について考える等）及び意義3点（探究を十分に保障する保育のなかで、乳幼児は生きる等）、発達に基づく科学の保育実践を提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、科学の保育実践は、探究の対象ではなく探究の内実によって定義されることを提起し、保育者の科学への戸惑いや理科教育の前倒しという誤解をほぐし、保育者の実践開発を推進する状況を整えた。次に、乳幼児の発達や保育理念を顧みないSTEAM（Science, Technology, Engineering, Arts, Mathematics）教育の見直しを求め、探究を通じた乳幼児の個の充実が、個と集団による将来的な社会貢献につながる可能性を示し、乳幼児期に適したSTEAM教育の理念を提示した。最後に、探究の発達の連続性と非連続性を踏まえた幼小接続期カリキュラムの開発に資する基礎的資料を提供した。

研究成果の概要（英文）：In the first study, I analyzed childcare cases and classified the reactions of infants and young children when they encountered scientific phenomena and the forms in which they attempted to clarify questions. In the second study, 5-year-olds examined a *Quercus variabilis* leaf and reported on the shape and color of the leaf, and the contents of that report were analyzed. In the third study, nursery and kindergarten teachers answered questionnaires about infants and young children's exploration of scientific phenomena. They interpreted infants and young children's exploration as interesting than cute. It indicates that the nursery and kindergarten teachers has the predisposition to develop scientific practice. Based on the results, the three essential elements and the three significance of scientific practice in childcare settings were identified.

研究分野：発達心理学，保育学

キーワード：探究 科学的な現象 乳幼児の反応 保育者の対応 自然 保育 STEAM教育 科学的リテラシー

1. 研究開始当初の背景

乳幼児を対象とする科学の保育実践の積極的な発信が続けられている。その背景として、幼児教育の充実、子どもの理数離れの抑制が挙げられる。しかし、科学の保育実践は「生き物の飼育」から「おもちゃ作り」まで多岐にわたり、何をもちょう科学の実践と見なし得るのかわかりにくい。また、科学や理科に対する保育者の戸惑いや苦手意識、理科教育の前倒しという誤解への批判も根強く存在する。更には、乳幼児の発達や保育理念を顧みないSTEAM (Science, Technology, Engineering, Art, Mathematics) 教育 (文部科学省, 2018) の保育への侵入が懸念される。保育のなかの科学の理念や理論の整備においては、一刻の猶予も許されない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、保育現場における科学実践の本質的な要素を明らかにし、実践を整理することである。第二に、科学の保育実践と他の保育実践との同質性と異質性に基つき、保育における科学の実践の意義を明らかにすることである。第三に、子どもの発達と関連づけながら、科学の保育実践を系統的に整理し、提案することである。

3. 研究の方法

[研究1] 保育のなかの科学的な現象に対する乳幼児の反応 (滝口, 2021)

分析対象: S 県 A 市内保育所 13 か所の 3 年間の縦断研究 (研究テーマ「科学する心を育てる」) の期間に、保育者により収集された実践事例 縦断研究期間: 2017 (平成 29) 年度～2019 (令和元) 年度

[研究2] 0～3 歳児の光の遭遇と探究 (滝口・長崎・小谷・富田, 2023)

分析対象及び縦断研究期間は上記の [研究1] と同様

[研究3] 5 歳児の自然物の探究: 夏季のアベマキの葉と向き合う (滝口, 2022a, 2022b)

調査対象: S 県 A 市私立認定こども園年長児 17 名 (男児 8 名, 女児 9 名) 調査時期: 2021 (令和 3) 年 7 月下旬 手続き: (1) 1 枚のアベマキの葉 (図 1) を対象児の前に置き、「この葉っぱについて、何かお話してくれるかな」と伝えた。(2) 「自然って聞いたことある?」と尋ね、聞いたことがあると回答した対象児に、具体的な内容を尋ねた。(3) 言語発達診断検査 (田中教育研究所, 1979) の語彙検査 (1) (2) を実施した (80 点満点)。

[研究4] 保育のなかの科学的な現象への乳幼児の反応に対する保育者の解釈

調査対象: S 県内 11 市 5 郡の幼稚園 8 園, 保育所・園 62 園, 認定こども園 130 園計 200 園に調査依頼書を郵送し、オンラインで回答を求めたところ、410 名から回答を得た。調査時期: 2023 (令和 5) 年 3 月 質問項目: [研究1] [研究2] で分析した資料から、科学的な現象の探究を描写した事例を抽出した。「0 歳児が、室内の壁に映っている光の模様 (陽光の反射) を、じっと見えています」「1 歳児が、蛇口の水を、親指と他の 4 本の指先でつかむように、ゆっくり触っています」「2 歳児が、すべり台で、砂をすべらせています」「3 歳児が、保育者もよくわからない野菜の種を植えて育てたいと言っています」「4 歳児が、畑で黄色になったきゅうりを見つけて「バナナできとる!」と言っています」「5 歳児が、カットしたかぼちゃの断面を匂いながら「なんで、かぼちゃなのに、メロンの匂いがするのかな?」とつぶやいています」の各事例について、「かわいい」「困った」「興味深い」の 3 種の解釈を 4 件法 (1: 全くそう思わない～4: とてもそう思う) で求めた。

4. 研究成果

[研究1] 保育のなかの科学的な現象に対する乳幼児の反応 (滝口, 2021)

実践事例に基づき、① 現象に遭遇した時の乳幼児の反応と② 疑問の解明に向けての乳幼児の試行の形態に分類して整理した (表 1, 2)。

表 1 [研究1] 現象に遭遇した時の乳幼児の反応

年齢	乳幼児の反応
0 歳児	見る, 声を出す, 声の高さが変わる, 笑う, 指をさす, 近寄る
1 歳児	見る, 目で追う, 手を伸ばす, 言葉を発する, 頷く
2 歳児	言葉を発する, 言葉を発しながら指をさす, 対象物に触る
3 歳児	言葉を発する, 他児に伝染する
4 歳児	言葉で現象を説明する, 自身が知っている事柄を発言する
5 歳児	言葉で現象を説明する, 自身が知っている事柄を発言する



図 1 アベマキの葉

表2 [研究1] 疑問の解明に向けての乳幼児の試行の形態

年齢	試行の形態
0歳児	手を伸ばす, 持つ, 握る, 振る, 落とす, 叩く, なでる, 口に入れる
1歳児	再現しようとする, 元に戻そうとする, 保育者の真似をする, 以上の行為に発声や発言が付随する
2歳児	五感を通して確かめる, 繰り返し試す, 保育者や他児の真似をする, 以上の行為に発声や発言が付随する
3歳児	真似をする, 比べる, 自分で考えたことを発言する, 自分で考えたことを試す, 根拠を述べる
4歳児	繰り返し試す, 他児の試行を真似る, 自分で予想を立てる, 自分で提案する, 自分で試行する, 生活体験に結びつけて考える
5歳児	自分で予想を立てる, 類似した事物を探索する, 見本の模倣ではなく自分で考えて試す 経験や発見に基づいて予測を立てて試す, 予測した結果のみならず予測外の結果にも疑問を持って試す, 他児と協同しながら試行する

① 現象に遭遇した時の乳幼児の反応は、3歳未満児は「見る」ことから「触る」ことへ、「発声」（「あー」等）から「言葉」（「ないねえ」「これ、冷たい」等）へと推移した。指さしを通して自身の認識を表現する事例も多く、指さしを受け取る他者（大人）の重要性を認識したい。3歳以上児は現象の「表現」（「えっ、何かおる！」「氷って、溶けたら水になるんや」等）から「説明」（「風船、マフラーでこすったら、浮くげんね！」等）へと推移した。

② 疑問の解明に向けての乳幼児の試行の形態について、3歳未満児は「手」を使用した試行から「五感」を使用した試行へと推移し、「事象の再現」に加え「他者の行為の再現」も登場した。3歳以上児は「他者の行為の再現」から「自身の仮説の検証」（「布じゃないから、ならん」等）へ、また、「個人での検証」から「協同での検証」へと推移した。

[研究2] 0～3歳児の光の遭遇と探究（滝口・長崎・小谷・富田，2023）

科学的な現象に対する乳幼児の「感情と意識」及び「試行と思考」を表3にまとめた。

0～2歳児は、現象そのものに（無心で）向かうことができる極めて興味深い時期である。0歳児クラス女児は、壁に太陽の反射を見つけ、指さして保育者に知らせ、自ら壁に近づいたり離れたりをしながら「ピカピカ」と言い、1歳児クラス女児は、たらいの水の太陽の光を「キラキラ！」と保育者に知らせ、水に手を入れてつかもうとし、うまくいかないとスプーンですくおうと試す。

3歳児になると、現象への直観的な対峙は減少し、現象の背景や因果関係を社会的な観点から解釈するようになる。例えば、水に反射して映った天井の光を見て、「おぼけかも！」と発言する。物理的な現象の擬人的把握は、素朴生物学の萌芽である一方で、科学的な原理の追究の一時的な遮断を要請する。その後、原理の追究が再開されると推測されるが、詳細な検討が待たれる。

保育の環境としての光について、4点述べる。まず、① 室内で出会うことができる。0～2歳児は室内で過ごすことが多いが、光は室内でも遭遇することができる自然現象である。次に、② 季節によって現れ方が異なる。季節によって太陽が園舎に当たる角度が変化するため、光との遭遇は偶発的である。その偶発性が、乳幼児に発見と驚きと探究をもたらす。そして、③ 他の素材と親和性がある。日光や影、陰の探究に加え、水や鏡の反射にまつわる事例も多い。最後に、④ 子どもの接近や接触が可能である。保育者は0～2歳児が光に近づいたり触ったりすることを、基本的には制限する必要がない。乳幼児は光にまつわる現象を存分に探究することができる。

0～2歳児が光に惹きつけられる背景として、3点を挙げる。まず、① 視覚的に把握しやすい可能性がある。1歳児の視力は0.1程度、2歳児は0.3程度、3歳児は1.0程度（小枝，1998）であり、光を視覚的に捉えることが比較的容易なのかもしれない。次に、② 不規則に動く。特に水に反射した日光は、不規則に揺れ動いて見える。その不規則な動きが、図らずも注視や探究を促すのではないか。最後に、③ 光という現象そのものに向かう時期である。3歳以上児に比して、0～1歳児は、現象そのものに能動的に関わろうとする。以上のような、0～2歳児の発達特性を踏まえた実践事例の開発を期待する。

表3 [研究2] 科学的な現象に対する乳幼児の「感情と意識」及び「試行と思考」

年齢	感情と意識	試行と思考
0歳児	(本能的に、思わず)繰り返す	試しながら試す
1歳児	考えて繰り返す	試しながら試す, 試しながら考える
2歳児	考えて工夫して繰り返す, 興味を持っている	試しながら考える, 考えながら試す
3歳児	現象の内面や背景を探る, 興味を持っている	試しながら考える, 考えながら試す 考えながら考える
4歳児	現象の内面や背景を探ることを楽しむ	(3歳児の内容に加えて) 考えてから試す
5歳児	現象の内面や背景, 因果関係を推測し, 検証することを楽しむ	(4歳児の内容に加えて) 試してみても修正する

【研究3】5歳児の自然物の探究：夏季のアベマキの葉と向き合う（滝口，2022a，2022b）

「この葉っぱについて、何かお話してくれるかな」という教示に対する報告内容に基づき、① 葉にまつわる話、② 葉の形状、③ 葉の色の3カテゴリを設け（表4）、IU数（内田，1996）を算出した。葉に自ら触れるなどした積極群（9名）と調査者から促された後で葉に触れた慎重群（7名）とを設け、平均IU数と標準偏差を算出した（表5）。

平均IU数について、対象に対する能動性（積極群，慎重群）×報告内容（葉の話，葉の形状，葉の色）の2要因分散分析を行ったところ，報告内容の主効果が得られ（ $F(1, 18) = 5.14, p < .05, \eta^2_p = .27$ ），葉の色よりも形状について，多くの報告がなされていた（ $p < .01$ ）。また，積極群の語彙得点（64.33）の方が，慎重群（54.57）よりも高かった（ $t(14) = 2.33, p < .05, d = .69$ ）。

対象への能動的な関わりが，対象への気づきの言語化を促すといった関連性は認められなかった。葉の色よりも形状の方が，5歳児が認識することができる情報が多かった（表4）。また，能動的に探究する5歳児の語彙得点，能動性が低い5歳児よりも高かった。自身の身体を使って探索することが，語彙の獲得を支える可能性が示された。対象に対する能動性が語彙獲得を促す一方で，獲得された語彙が対象への思考を駆動し，能動的な試行を促すという流れも想定される。

積み木やままごと道具などは，類似した規格の商品が揃えられ，数が限られ，使い方や扱い方が決められている。逸脱した使用は認められず，否定され嫌悪される。一方，自然物は，一つとして同じものはなく，数が限られることは少なく，どのように扱うのかは（基本的には）全ての人に開かれている。予め決められた事物の扱い方の体得を求められることが多い現状にあり，乳幼児期に自らの意思に基づいて（自然に関係する）対象と対峙することの意味を丁寧に考えたい。

【研究4】保育のなかの科学的な現象への乳幼児の反応に対する保育者の解釈

回答者の保育経験年数に基づき，0-4年群（84名），5-9年群（59名），10-19年群（94名），20年以上群（173名）を設けた。事例別の評定平均値（最大値4）を図2から図7に示す。

現象に対する解釈（かわいい，興味深い）×経験年数（0-4年，5-9年，10-19年，20年以上）の2要因分散分析を行ったところ，3歳児事例「わからない野菜の種を植えて育てたい」（ $F(3, 406) = 5.28, p < .001, \eta^2_p = .04$ ）に交互作用が認められた。0-4年群よりも10-19年群や20年以上群の方が「かわいい」と評定したが（ $p < .01$ ），「興味深い」は群間差がなかった。経験年数が長くなると，無意味に思える乳幼児の探究に，必要性和必然性を見出すようになるのかもしれない。

多くの事例で「かわいい」より「興味深い」の評定が高かったが，4歳児事例「畑の黄色のきゅうりをバナナと言う」のみ，「かわいい」が上回った。「興味深い」という解釈は，保育者による科学実践の更なる開発の可能性を示している。上記の3歳児事例と4歳児事例は，科学的に適正な解答ではなく，自身の解答に至るまでの試行錯誤に浸る保育実践として，改めて開拓したい。

表4 [研究3] 3カテゴリと5歳児の報告内容の一部

カテゴリ	報告内容
① 葉にまつわる話	「僕もなかなか知らんけど，保育園の庭にあるよ」「いも虫って，葉っぱ食べるの好きやから，いも虫捕まえた時，葉っぱ入れたらいいんだよ」「秋の葉っぱとかありますよね，落ち葉とかありますよね，色んな葉っぱとかありますよね」
② 葉の形状	「こっちがツルツル」「なんか，ガタガタする」「へこんでる」「ここ，トゲトゲ」「チクチク」「ここに針ある」「グジュグジュする」「やらかくて破れそうな感じ」「こっちの方は線太いけど，こっちの方は細い」「アリ食べてみたい，ここ」
③ 葉の色	「裏返してみたら，違う色」「同じ色じゃない」「白色みたい」「何か，こころ，緑，黄緑みたい」「ちょっと薄い」

表5 [研究3] 葉に対する能動性の違いからみたIU数の平均値と標準偏差

	① 葉の話		② 葉の形状		③ 葉の色	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
積極群	2.33	4.12	5.11	3.76	0.67	0.87
慎重群	1.14	1.57	2.71	2.14	0.71	0.95

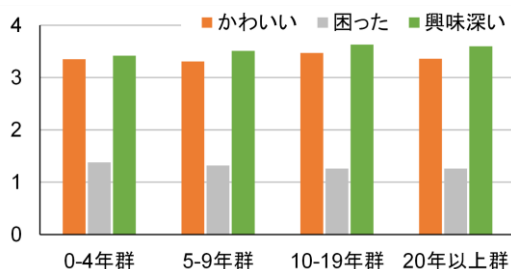


図2 [研究4] 0歳児事例の評定平均値

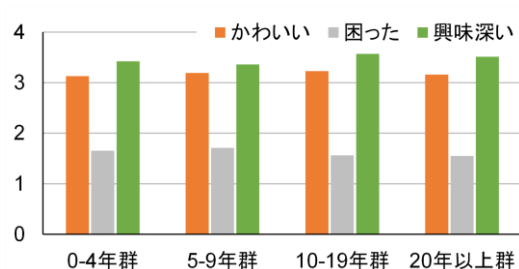


図3 [研究4] 1歳児事例の評定平均値

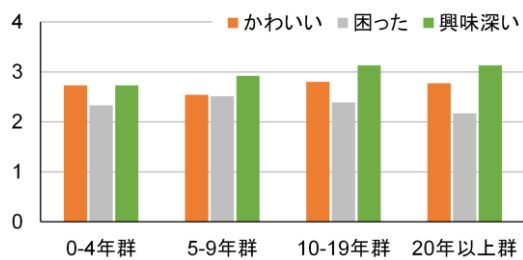


図4 [研究4] 2歳児事例の評定平均値

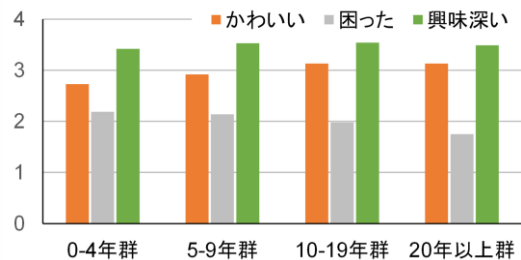


図5 [研究4] 3歳児事例の評定平均値

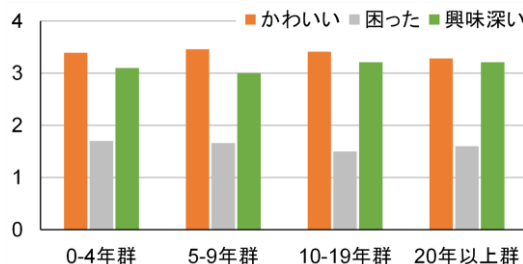


図6 [研究4] 4歳児事例の評定平均値

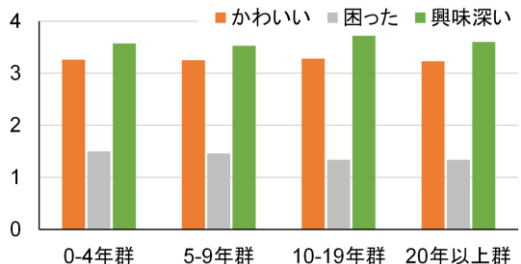


図7 [研究4] 5歳児事例の評定平均値

[考察1] 保育現場における科学の実践の本質的な要素

まず、①身の回りのあらゆる事象に関する機構、因果関係、相関関係について思いを巡らせることである。次に、②身の回りのあらゆる事象に関する機構、因果関係、相関関係を想定し、自分なりにまたは自分たちなりに関わり、多様に試すことである。試みが想定通りにならなかつたり、頓挫したりしても全く問題ない。最後に、③現時点において科学的に適正であると判断される解答に辿り着くことではなく、自らの解答に辿り着くまでの試行錯誤そのものに際限なく浸ることである。以上の3点を包括し、「探究」と定義することも可能である。

[考察2] 保育現場における科学の実践の意義

まず、①「探究」は、科学の保育実践の本質的な要素であるとともに、乳幼児の生命あるいは生活の本質的な要素でもある。「探究」を十分に保障する保育のなかでのみ、乳幼児は真に生きることができる。保育者は、「探究」の過程と成果を、安易に否定してはならない。次に、②「探究」を通じて自分自身の真実に辿り着く経験が、少しずつその人をかたちづくる。現象と向き合う過程で、自分自身と向き合い、対話する。最後に、③「探究」を通じて自分自身を認められた乳幼児は、他者が他者であることを受容する。科学の保育実践は、科学的な思考の萌芽を促し育てるとともに、あるいはそれ以上に、子どもが一人の人となる機会を豊かに提供する。

[考察3] 発達に基づく科学の保育実践の系統性

乳幼児の「探究」を可能にする保育者の関わりとして、3歳未満児及び3歳以上児に共通するのは、「①あえてしない」「②一緒にしてみる」「③繰り返す」「④五感を使う」「⑤引きだす」「⑥わざとまちがう」の6項目である。3歳以上児は、以上の6項目に「⑦他の子どもにたずねる」が加わる。年齢が上がるに従い、保育者は、材料を多様にまた適度に提供したり、条件を多様にまた適度に例示したり、協同での「探究」を促したりする機会が増える。年齢が上がっても、科学的に適正であると判断される解答を、「探究」に先んじて与えてはならない。以上の関わりは、乳幼児一人一人の丁寧な理解を必要とし、また、関わることで更なる乳幼児理解を促す。

<引用文献>

- 小枝 達也 (1998). ヒトの視覚の発達と発達心理学 BME, 12, 89-94.
 文部科学省 (2018). Society 5.0 に向けた人材育成 (概要) Retrieved May 31, 2023 from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844_001.pdf
 滝口 圭子 (2021). 保育の中の科学を考える——年齢別にみた乳幼児の活動—— 日本心理学会第85回大会発表抄録集, 183.
 滝口 圭子 (2022a). 5歳児とアベマキの葉——1枚の葉とどのように向き合ったのか—— 日本発達心理学会第33回大会論文集, 94.
 滝口 圭子 (2022b). 5歳児の自然物の探索と報告——1枚のアベマキの葉とどのように向き合ったのか—— 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要 教育実践研究, 48, 17-25.
 滝口圭子・長崎元気・小谷卓也・富田昌平 (2023). 保育のなかの科学 3——3歳前後の子どもたちと光との出会い—— 日本発達心理学会第34回大会論文集, 96.
 田中教育研究所 (編) (1979). 言語発達診断検査 田研出版株式会社
 内田 伸子 (1996). 子どものディスコースの発達 風間書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 滝口圭子	4. 巻 48
2. 論文標題 5歳児の自然物の探索と報告：1枚のアベマキの葉とどのように向き合ったのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要 教育実践研究	6. 最初と最後の頁 17-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00067156	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 滝口圭子	4. 巻 308
2. 論文標題 認識と表現：科学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊保育問題研究	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝口圭子・鷲山靖・若山育代	4. 巻 13
2. 論文標題 幼稚園年長児の自由遊び時間における造形活動に関する事例的縦断研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 75-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00061944	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 滝口圭子	4. 巻 305
2. 論文標題 認識と表現：科学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊保育問題研究	6. 最初と最後の頁 125-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝口圭子・榎本(寺田)容子・宮本昌子・安井宏	4. 巻 14
2. 論文標題 発達障害のある小学生を対象とするキャリア教育プログラムの開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床発達心理実践研究	6. 最初と最後の頁 73-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝口圭子	4. 巻 299
2. 論文標題 認識と表現：科学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊保育問題研究 第58回全国保育問題研究会・報告	6. 最初と最後の頁 112-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝口圭子	4. 巻 690
2. 論文標題 トラブルという形で立ち現れる育ち：幼児期のトラブルを考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ちいさいなかま1月臨時増刊号 特集：子ども同士のトラブル	6. 最初と最後の頁 88-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝口圭子	4. 巻 173
2. 論文標題 保育のなかの実体験について考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本保育学会会報	6. 最初と最後の頁 2-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 滝口圭子	4. 巻 669
2. 論文標題 ときほぐす心とからだ からみあう経験とごっこ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ちいさいなかま	6. 最初と最後の頁 38-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 滝口圭子・野口隆子・田爪宏二・富田久枝
2. 発表標題 幼児教育と小学校教育の接続期を生きる子どもと保護者(5) : 年長児から小学校2年生までの縦断研究から見てきたこと
3. 学会等名 一般社団法人日本保育学会第75回大会 (自主シンポジウム) 聖徳大学 (オンライン開催)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 幼少期を外国で過ごした児童を対象とする縦断調査 : 小学校1年生をどのように過ごしたか
3. 学会等名 一般社団法人日本LD学会第31回大会 (ポスター発表) 国立京都国際会館
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝口圭子・浅川淳司・江尻桂子
2. 発表標題 保育の場における特別支援と心理学との出会い : 実践を貫く視点を得るために
3. 学会等名 一般社団法人日本LD学会第31回大会 (自主シンポジウム) 国立京都国際会館
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 幼少期を外国で過ごした年長児に対する保育者の言葉がけ：幼児教育における生活言語と学習言語
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第32回大会（研究発表）（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 幼児のいる家庭におけるメディアの利用と読み聞かせ
3. 学会等名 一般社団法人日本発達心理学会第34回大会（ポスター発表）立命館大学大阪いばらきキャンパス
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 滝口圭子・長崎元気・小谷卓也・富田昌平
2. 発表標題 保育のなかの科学3：3歳前後の子どもたちと光との出会い
3. 学会等名 一般社団法人日本発達心理学会第34回大会（ラウンドテーブル）立命館大学大阪いばらきキャンパス
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 幼少期を外国で過ごした日本人幼児の幼小接続期の追跡
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会発表論文集，405.（ポスター発表） オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝口圭子・野口隆子・田爪宏二・富田久枝
2. 発表標題 幼児教育と小学校教育の接続期を生きる子どもと保護者（4）：小学校2年生を生きる
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会発表論文集，62-63.（自主企画シンポジウム） オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 保育の中の科学を考える：年齢別にみた乳幼児の活動
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会発表抄録集，183.（ポスター発表） オンライン開催
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 幼児期を生きることとつなぐこと
3. 学会等名 日本LD学会第30回大会 教育講演（オンデマンド）切れ目ない支援 オンライン開催（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 5歳児とアベマキの葉：1枚の葉とどのように向き合ったのか
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会論文集，94.（ポスター発表） Web開催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝口圭子・小谷卓也・長崎元気・富田昌平
2. 発表標題 保育のなかの科学2：かがく遊びの可能性を探る
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会論文集，70.（ラウンドテーブル） Web開催
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 これからの「幼児教育」施設と小学校との円滑な接続に向けて：北陸地区の幼小接続の取り組みを中心に「石川県の取り組み：金沢市に焦点をあてながら」
3. 学会等名 日本保育学会中部地区第5回研究集会 オンライン開催（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 滝口圭子・野口隆子・田爪宏二・富田久枝
2. 発表標題 幼児教育と小学校教育の接続期を生きる子どもと保護者（3）：小学校1年生を生きる
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会（会員企画自主シンポジウム31AM1-1C-SS9）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 幼稚園年長児の製作活動を追跡する：自由遊び時間に何をどのように作ったのか
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会（口頭発表31AM2-2D-0S1）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 年長児がとらえる小学校生活：楽しみなこと，不安なこと
3. 学会等名 日本教育心理学会 第61回総会発表論文集，215.（ポスター発表）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 滝口圭子・野口隆子・田爪宏二・秋田喜代美
2. 発表標題 幼児教育と小学校教育の接続期を生きる子どもと保護者（1）：年長児期を探る
3. 学会等名 日本教育心理学会 第61回総会発表論文集，96-97.（自主企画シンポジウム）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 滝口圭子
2. 発表標題 保育における科学の実践に関する保育者の意識：保育経験年数別にとらえた相違から
3. 学会等名 日本発達心理学会 第31回大会論文集，458.（ポスター発表PS8-1）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 滝口圭子・野口隆子・田爪宏二・富田久枝
2. 発表標題 幼児教育と小学校教育の接続期を生きる子どもと保護者（2）：小1という時期を探る
3. 学会等名 日本発達心理学会 第31回大会論文集，59-60.（自主シンポジウムSS12）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 榎本容子・清野絵（編著）知名青子・武澤友広・渋谷友紀・井戸智子・滝口圭子・宮澤史穂（著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 195
3. 書名 発達障害の就労とキャリア発達：ライフステージをつなぐ支援	

1. 著者名 若月芳浩・宇田川久美子（編著）滝口圭子他8名（著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 222
3. 書名 新しい保育講座14 障害児保育	

1. 著者名 心理科学研究会（編）滝口圭子他27名（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 316
3. 書名 新・育ちあう乳幼児心理学：保育実践とともに未来へ（第11章「就学前後の子どもたち」担当p.208-226.）	

1. 著者名 川畑直人・大島剛（監修）郷式徹（監修・編著）西垣順子（編著）滝口圭子他8名（著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 220
3. 書名 公認心理師の基本を学ぶテキスト8 学習・言語心理学：支援のために知る「行動の変化」と「言葉の習得」	

1. 著者名 田爪宏二（編著）滝口圭子他9名（著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 よくわかる！教職エクササイズ2 教育心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------